市民の力／地域を起こす人材の育成を

谷口吉光（秋田県立大学）

秋田県では県民の行政依存（お上頼み）の体質がなかなか抜けないと言われてきたが、地域づくりの現場ではようやく住民が主体となった取り組みがあちこちで見られるようになった。男鹿市と秋田市の市民団体が中心となって結成した「男鹿半島まるごと博物館協議会」の最近の活動などは、企画力と実行力のある市民団体が短期間にどれほどめざましい成果を挙げることができるかを示した格好の例と言えるだろう。

ハタハタ、地魚、しょっつる、ジオパーク、菅江真澄など男鹿にちなんだ素材をテーマに、ジオトレッキングツアー、男鹿・イタリア魚醤フォーラム、しょっつる料理博覧会、しょっつる講習会、マイしょっつる運動、地魚伝承士検定試験などユニークなイベントを立て続けに開催して新聞・テレビをにぎわせた。

「この頃なんか男鹿が元気じゃない」「男鹿の話題が多いよね」などという声が聞かれるようになったのも、この協議会の働きが大きかったと思う。

私自身もこの協議会に参加して、改めて「市民の力」について考えさせられた。秋田でも、市民の中にはユニークなアイディアを持った人、特別な専門知識や技能を持った人、実務能力のある人、すごい実行力のある人などがいるが、こういう人たちはふだんバラバラに暮らしているのでその力は眠ったままだ。

市民の潜在力を活かすにはいくつかの条件が必要になる。まず、多様な市民が出会える場を作ることである。出会いと交流の場があって、初めてどこにどういう人がいるかがわかる。次にさまざまな市民が連携して実現する事業のイメージを組み立てるプロデューサー（またはコーディネーター）が必要である。また、あまり指摘されることがないが、実際の事業の企画から進行管理までをきちんと担当できる有能な事務局も必要不可欠な存在だ。

先ほどの男鹿の協議会も、各部門にすぐれた担当者がいたばかりでなく、事務局長のＡさんの驚異的な指導力・運営力と、事務局Ｔさんのいつも冷静沈着な実務能力があって初めて成功に導くことができたと言える。

問題はこのようなプロデューサー、コーディネーターや事務局を担える人材が足りない、それも圧倒的に足りないことである。

「人と人をつなぐ」仕事には幅広い能力が必要だ。どんな人とも仲よくなれる能力をはじめ、文書作成能力、交渉力、調整力、企画力、実行力、情報収集と分析能力、時代の流れを読む力などが求められる。事務局にも、一般的な事務職の技能に加えて、多様なプロジェクトを運営する対応力が必要になる。

鳩山政権が標榜する「新しい公共」の担い手として市民やNPOに大きな期待が寄せられているが、秋田でも市民力を結集するための人材を多数育成する体制を早急に作り上げることが求められている。

（朝日新聞「あきた時評」　2010年3月17日掲載分を加筆・修正した）